受賞者の業績

小笠原　洋　子　51歳　(保健婦・青森県)

昭和42年、十和田市に奉職。以来28年余、母子を取り巻く環境の劣悪だった当地で母子保健の向上に尽力。従来別々に管理していた妊婦と乳児・幼児の指導体系を一本化し、妊婦から乳幼児までの一貫した早期指導体制を確立。さらに各組織、医療機関のネットワーク化を図り、乳児死亡、低体重児出生を減少させた。地域に根ざした活動は高く評価されている。

赤　井　通　子　53歳　(助産婦・福島県)

12年間の病院勤務の後、昭和51年、竹田綜合病院へ着任。院内・院外における看護研究や、看護専門学校の講師として臨床実習指導にあたる。また地域の保健婦と共に母親学級を開催する等、地域の母子保健活動へも意欲的に取り組む。常に看護の本質を追求し、納得のいく看護・助産の提供に専念する姿勢は、後輩からの信頼も厚く、他の模範となっている。

鶴　田　ふ　く　51歳　(保健婦・茨城県)

昭和42年、水戸市役所へ着任。以来、一貫して乳幼児の健康増進に努める。同62年より母子保健事業の電算化に取り組み、家庭訪問や継続指導に多大な成果をあげた。平成元年、県内初の３歳児健康診査の委託を受けて実施。関係機関との連携を取りながら要精検児への継続指導を行う。管内26名の保健婦のリーダーとして指導力を発揮し、幅広く活動している。

秋　葉　早　苗　53歳　(保健婦・千葉県)

昭和42年、千葉県東金保健所に着任。「母子保健の問題は地域の健康問題の糸口である」との信念の下、きめ細かい保健指導を展開。その実績が認められ、同53年、東金市に奉職。早期療育の会の発足、母子保健推進員の育成等に持ち前の力量を発揮、地域の母子保健体制の確立に貢献した。地域に密着した活動は高い評価を受け、今後の活動が大いに期待される。

鈴　木　木の実　44歳　(保健婦・山梨県)

昭和48年、市川大門町役場に奉職。活動の原点に母乳哺育を置き、母乳実態調査の実施、訪問指導等により母乳哺育の推進に寄与した。また、町内四地区で構成される連合愛育会の育成に尽力。愛育会への理解と協力を得る気運づくりに努め、同63年には全戸加入を果たした。管内保健婦の指導的役割を担い、地域のリーダーとして幅広く活動している。

盛　永　宏　子　49歳　(保健婦・富山県)

昭和44年、富山保健所に着任。以来、乳児死亡・新生児死亡等の多い本県で、妊娠・出産・育児の一貫した保健指導体制の強化に取り組む。同48年、「すこやかに生み育てるための母子保健対策」を創設、出生前からの総合対策の施策化に尽力、今日の乳幼児発達健診や療育指導の基礎を築いた。現在は母子保健事業の移譲に向け、市町村指導に手腕を発揮している。

家　永　信　彦　49歳　(医師・和歌山県)

昭和57年、国保日高病院の小児科医長に着任後、御坊保健所管内の乳児健診を開始。医師２人体制という多忙な業務のなか、休診日を利用した健診協力であった。管轄地域も広域にわたり、片道60kmの僻地健診にも積極的に取り組み、健診の質の向上に寄与。平成５年、小児科医院開業後も健診のほか、母子保健の啓発活動を推進。今後の活動が大いに期待される。

宮　崎　節　子　47歳　(保健婦・山口県)

昭和47年、三隅町に奉職。母子保健の水準の把握が急がれた当町で母子保健重点対策を樹立し、母子保健行政の強化に努めた。母子保健の課題であった低体重児の出生数の減少と死産率の低下に大きな成果をあげた。同58年、管内でもいち早く母子保健推進協議会を設置、行政と住民のパイプづくりに寄与。常に住民サイドに立った活動は高く評価されている。

和　田　良　子　52歳　(保健婦・徳島県)

保健所保健婦、県立看護専門学校の教員等を経て、平成元年、池田保健所へ着任。管内の母子保健事業を見直すことにより、保健所が実施すべき母子保健事業、各時期に必要なサービスを明確化、母子保健の質的向上に寄与した。また、心身障害児父母の会の組織強化により、地域住民の障害児・者への理解を深める等、常に住民サイドに立った活動を展開している。

森　　夏　實　51歳　(保健婦・長崎県)

看護婦・教員を経て、昭和48年香焼町へ保健婦として着任。乳幼児健診に歯科健診と歯科衛生士による指導を導入するとともに健康教育を展開、歯科対策の推進に貢献した。本事業を通じ地域の専門家集団のネットワークができるまでとなった。また、地域住民、保母、保健婦による保育講演会、保育まつり等を継続開催する等、地域に根ざした活動を展開中である。

佐　保　京　子　38歳　(保健婦・大分県)

3年間の病院助産婦を経て、昭和58年、三重町役場に保健婦として着任。同59年愛育班を結成、家庭訪問と班員会議を軸に精力的な活動を展開、保健福祉計画の柱としての愛育班の必要性を位置づけた。また、従来の母親学級に調理実習試食会等を取り入れ受講者の親睦を図り、育児サークル「モンキーキッズ」の結成へと発展させる等、多くの実績をあげている。

三　島　ヨシエ　44歳　(保健婦・横須賀市)

昭和53年、横須賀市南部保健所に着任。以来59年まで転勤者の多い地域で、新しい土地で不安をもつ初妊婦にきめ細かい支援活動を展開。母親教室に安産動作を取り入れ、分娩不安の解消に努めた。平成２年より横須賀市の委託を受け、新生児・妊産婦・家族計画訪問指導を実施。母親のよき援助者として地域での信頼が厚く、その活動は高く評価されている。

世　古　八重子　52歳　(保健婦・名古屋市)

昭和43年、名古屋市に保健婦として着任。母子保健管理システムの体制づくり、地元病院との連携による障害児の早期発見、早期療育指導体制の整備等に寄与した。また、都市化が進み育児の孤立化がみられるなか、従来の育児教室とは趣を変えた“近くの友だちづくり”の場としての子育て教室、夫婦単位の父親教室等の開設等、育児環境づくりに大きく貢献した。

北　村　佐恵子　51歳　(保健婦・尼崎市)

昭和43年より27年余、一貫して地域の母子保健活動に従事。市立いぶきの家の専属保健婦として小児公害認定患者の健康回復訓練指導にあたり、多くの実績をあげた。また、わが国で初めて双胎妊産婦、双子育児のための教室を開設したほか、管内の同和地区保育所での赤痢集団感染事件では、昼夜を問わず奔走、早期集結を実現させる等、精力的に活動を展開中である。

神　谷　整　子　44歳　(助産婦・文京区)

病院勤務を経て昭和61年、出張助産所を開業。同時に保健所における母親・両親学級の指導、新生児・褥婦家庭訪問指導、母と子の夜間健康電話相談等に取り組み、地域の母子保健活動に寄与した。その他、大学や日本助産婦会における教育活動、母子保健に関する研究活動等、幅広い活動を展開。地域助産婦の指導的役割を担い、後継者の育成に貢献している。